F・ブリコー著

『現代ペルーの権力と社会』

François Bourricaud, *Power and Society in Contemporary Peru*, translated by Paul Stevenson, Faber and Faber Ltd., London, 1970, 356 p.

I

本書は，1930年代以降のペルーの社会と政治の漸進的な (evolutional) 変容の特質を「社会的動員 (social mobilization)」……近代的部門の拡大，伝統的経済の衰退，都市の住民の不満，などを相互に結んでいる一つの過程——の角度から歴史的に考察したものであり，特に大量の大衆の都市への移動，その政治的，社会的影響力の増大にともなって，政治のあり方・スタイルがどのように変化し，またその変化した政治がペルーの社会をどのように変化させたか，を扱った労作である。

著者はフランスの社会学者。1922年生まれ。1947～50年ソルボンヌ大学社会学部助手。1950～52年ハーバード大学のパースンズ (T. Parsons) のもとでのロックフェラー・フェロー。1952～54年フランス国立科学センターの調査員としてペルーに行き，ペルーで最も伝統的かつ後進的な地域といわれていたプノ (Puno) の社会的，文化的変化の研究に従事。1954年ポワティエ大学社会学部，1955年ボルドー大学哲学部に在職。1956年前掲センターからブラジルへ，またユネスコからペルーへ，おもむいている。1969年ブリュッセルでのヨーロッパのラテンアメリカ会議には主催者の一員としてパリ大学より参加。著書・訳書には次のものがある。

Éléments pour une sociologie de l'action: essais de T. Parsons traduits et commentés (Paris, 1955), *Esquisse d'une théorie de l'autorité* (Paris, 1961), *Changements à Puno, Institut d'Amérique latine* (Université de Paris, 1962).

本書の目次を紹介しておこう。

序文：社会的動員の諸問題に直面した少数支配階級（オリガルキー）

第1部　二重社会の動員

　第1章　オリガルキー支配の性格と諸形態

　第2章　中間階級の従属

　第3章　「忘れられた人々」——持たざる者の暴力

第2部　何がなされるべきか？……二重性 (dualism) の修正：動員の過程——

　第1章　「アプラのみがペルーを救いうる」

　第2章　現実主義者達と現実

　第3章　ヒューマニズムと恐怖：極左勢力の抵抗

　第4章　人民行動党 (Acción Popular)

第3部　ゲームのルール

　第1章　「共存 (convivencia)」

　第2章　「柔かい独裁 (dictablanda)」

　第3章　左傾化へ動くか？

結　論

なお近代化 (modernization) とは，厳密には区別される「社会的動員」について，著者はカール・ドイッチュ (Karl Deutsch) に依拠しており，本書の中では，大量の大衆の農村から都市への移住，そこでの生活様式・意識の変化を基軸にしている (Karl Deutsch, "Social Mobilization and Political Development," *The American Political Science Review*, September, 1961)。

ブリコーによる本書は，1967年に出版された原著（フランス語）の英訳であるが，変更・修正はないようである。

II

まず著者の問題意識(序文)からみていこう。それは，社会学におけるコミュニティー・スタディーズへの方法的批判と，ペルー社会の現状は絶望的であり暴力的な革命が起きることは必至であるとする見解への批判，にある。

前者は，著者が1950年代の初期にプノの研究に従事した経験に由来するもので，当時流行していたコミュニティー・スタディーズのパースペクティブに限界を感じて，プノという一地方の変化もペルー全体に影響を与えている大きな変容の要因（＝社会的動員）に照らして理解しなければならないとするものであり，後者は，当時著者の近辺で流布されており，著者も当初は受けいれていた見解 (explosion theory, catastrophe theory) でもあってこの見解に対して著者は，みずからの経験と観察をもとに，ペルーの近代化は革命的騒乱なしに行なわれる可能性が強いと批判する。その論拠をあげておくと，第1に，1930年前後に顕著となった大衆の都市への大量移動，その政治的社会的要求の増大——これを著者は世界的な規模で生起しつつある社会的動員の過程の一環とみる——，インディオ問題，農業問題は，ペルーのオリガルキーにとって大きな危機ではあるが，オリガルキーの性格も，

またペルー社会も全体として大きく変わってきているがゆえに，オリガルキーは，この危機に十分対処しうる政治的技術と柔軟性を備えていること。第2に，ペルーの政治には，暴動や対立する諸勢力の盲目的衝突を回避する自動メカニズム――固有の秩序と正統性 (legitimacy)――が存在し，機能していること。大筋においてはこの2点にあるといってよい。以上で著者の問題意識は明らかとなった。内容を順次略述してゆくことにして，本書全体の論旨の展開を紹介しておくと(目次参照)，第1部では，社会的動員に伴って生起した，ペルーの諸階級・階層の内的変化を，第2部では二重社会 (dualistic society) の政治的修正 (modification of dualism) 要因は何であったか，という観点から，アプラ（APRA，ラテンアメリカ革命人民同盟）を中心とする政治諸勢力の歴史的な展開・変化の過程を，第3部では，ペルーの政治に固有な特質を，それぞれ考察し，ペルーは二重社会を脱する方向に動きつつある，というのが結論となっている。

第1部　まず著者は，1930年前後のペルーを，経済的には伝統的部門と近代的部門の同時存在，社会的には上層階級と下層階級との間の断絶，政治的には少数の地主によって構成された支配階級と無力な大衆，というかたちでの「二重社会 (dualistic society)」として把握する。そこでの諸階級・階層の性格はどのように変化したか，これを著者は「古い型」と「新しい型」との対比という方法で分析している。

まずオリガルキー。その経済的基盤はどうか？　著者によれば，オリガルキーには二つの系譜があって，高地 (sierra) のそれと沿岸地帯 (costa) のそれである。従来，高地を支配していた地主ガモナル (gamonal) は，スペインの征服者達の精神的伝統を継承し，全能の権力者として武力によってインディオを支配してきたが，ここにはインディオの生活の保護者的性格を持つ地主も登場しており，それゆえ，これらの地主は，スペインの植民地時代以来変化していないといったものではなく，かなり最近になってできた大土地所有もあり，比較的流動性を持ち，その性格も多様である。

また沿岸地帯に，砂糖・棉花の大プランテーションを所有する地主も，最近は，鉱山・金融・不動産・新規の諸産業，など多角的に投資しており，農産物・鉱物資源の輸出業者としてだけでなく，ペルー経済の基幹部門を一手に握り，輸入の動向も左右している。換言すれば，沿岸地帯のオリガルキーは，地主であるとともに実質的には，ブルジョアジーに転化しているということであろう。

このブルジョアジーの特徴は，企業家のそれではなく，新規の経済分野は，他の資本家に開拓させて，成功したとみるや金融上の優位を利して株を買いしめ，リスクを回避することによって，富を集中させてゆく投機師的性格を持ち，経営の実権も家族・血縁関係でかためてはいても，最近はそれ以外の人々にも門戸を開きはじめているという。

オリガルキーと政治との関係はどうであろうか？　オリガルキーは，政治的には産業界と緊密な関係を結んでいるが，オリガルキー出身の政治家は最近は少なく，さらに職業的政治家も登場し，オリガルキーとかれらとの間に一定の距離も存在しはじめた。それゆえ，オリガルキーが政治の表面に登場することはまれであり，これらのことは，オリガルキーが従来の直接的支配から間接的支配に転じたしるしである，と著者はみている。

さて，中間階級はどうか？　オリガルキーの経済的，政治的性格に規定されているため，“middle class”を分析する際に，著者はそれを，権力との関係という観点から，「中間階級」としてとらえている。従来この階級は少数の法律家，官吏，教師，インテリなどによって構成されていたが，著者はこの職業的区分以外に，消費様式による区分も導入，一定の耐久消費財を購入しうる階層をも中間階級に含める。したがって，中間階級は，量的にも質的にも，かなり変化したことになる。だが全体としてみれば，この階級の社会的地位は権力に対して従属的，限界的であり，その価値観も多様で，矛盾した行動様式を持つという。

つぎに「忘れられた大衆」はどうであろうか？　この階級の特徴は，社会的動員に伴って，抑圧されていた存在から，影響力を持つ存在へと転化したことがいちばん大きい。その影響力について著者は，鉱山・銀行・鉄鋼労働者のストライキ，バリアダス (barriadas, スラム) の住民の行動様式，地主の土地へのインディオの侵入 (invasion)，などを例にとって，「持たざる者」の暴力が，どのような局面で発現し，どのような性格をおびるか，に焦点をしぼって考察している。そしてそのいずれもが，暴動的様相を呈することはあっても，現実には，この階級の政治的組織化が進んでおり，既成の労働者の全国的連合組織に包摂されるにつれて，これらの運動・争議は政治問題化し，それなりの影響力を発揮するが，運動・争議そのものは改良的な性格の域を出ないものである，と強調している。

またかつて，革命勢力が，革命の主体として期待したインディオは，農業労働者に変わり，バリアダスの住民も，公共投資による雇用機会の増加のため所得水準も悪くはなく，その政治意識も，家父長的な軍人政治家を支持する傾向が強いという。

第2部　このように，1930年代以前の，ある意味では，両極端的性格を持っていたペルーを修正し，……その徴候は大衆の組織化と中間階級の増大――，国民的統一(national integration)の方向に導いた原動力は「社会的動員」であるが，この動員の過程に拍車をかけた要因は，ラテンアメリカの大陸的規模での革命を志向して失敗した急進的 (radical) 政治組織アプラの30年以上にわたる活動にあった，として著者はその歴史を分量的にも本書の中ではいちばん大きく扱っている。

メキシコ革命に影響され，1924年にアヤ (Haya de la Torre) によって結成されたアプラは，反アメリカ帝国主義，ラテンアメリカの政治的統一，土地・産業の国有化，パナマ運河の国際管理，被抑圧人民・階級との連帯を掲げて，労働者・農民・インテリ・ブルジョアジーを結集して，国家資本主義によってアメリカ帝国主義からの解放を構想，1920年代末から，共産党と対立しつつ，ペルーでの活動を開始した反帝国主義政治組織であるが，オリガルキーによるはげしい弾圧を経験する過程で，地下活動を余儀なくされ，その後，オリガルキーの代弁者の大統領を支持して手を結び，アプラ党員を議員・閣僚に送りこんで1940年代に変節・反動化し(第2次大戦後，再び弾圧されるが)，たとえ帝国主義は先進資本主義にとっては最後の段階であろうとも，後進国の発展にとっては最初の段階であり，それは必要である，として，1960年代には，親米・反共・反農地改革・反石油国有化・オリガルキー擁護の党へと変貌し，左翼勢力からは，「裏切り分子」「ラテンアメリカの国民党」とよばれて，敵視されるにいたっている (Carleton Beals, *Latin America: World in Revolution*, London, Abelard-Schuman, 1963, p. 27; Jorge del Prado, "A book that calls to action," *World Marxist Review*, January 1960, pp. 88～90; Regis Debray, *Strategy For Revolution*, ed., Robin Blackburn, London, Jonathan Cape Ltd., 1970, p. 241)。

著者によれば，このアプラが提起したインディオ大衆，の中に現状の変革と国民的統合の原理をみいだそうとした土着思想としてのインドアメリカニズム，およびそれに由来する諸改革案と戦闘的な活動こそが，ペルーの政治に決定的な変化をもたらしたという。すなわち，1930年代以降の政治はアプラを中心として展開し，「社会的動員」を背景としたこのイデオロギー政党の攻勢によって，オリガルキーも19世紀以来の内部抗争を中断して結束し，その階級的利益を国民的利益として擬制化するようなイデオロギー的対応を余儀なくされ，インディオの支配・服従関係を維持するために，スペインの伝統は，征服者たちとインディオとの異人種融和にそのすばらしさがあったとして，これを国民統合の理念として掲げる家父長的民族主義，また輸出業者の立場から，自由貿易促進・不生産的財政支出反対を唱える自由主義，を生み出した（第2章)。

また著者は，アプラと敵対関係にある左翼勢力について，キューバ革命の成功以後，激しくなった旧左翼と新左翼の革命路線をめぐる亀裂や，毛沢東主義者，カストロ主義者，トロツキスト，などのペルー社会観を概観して，これらの左翼勢力の思想には，初期のアプラが掲げた理念，たとえば反帝国主義・反オリガルキー・農地改革・インディオを主体とする革命論等が刻印されている，としているが，これらの勢力は小さく，暴力による革命路線は，大衆には支持されていない，としている。

さらに，1963年に大統領となった人民行動党 (Acción Popular) のベラウンデ (Belaunde)。この建築技師出身の政治家が，民衆の中に創造力をみいだし，またみずからの技術的思考を生かして，道路網をはりめぐらすことから経済建設を進めようとしたこと，およびかれの農地改革，石油国有化政策，などには，初期のアプラの問題提起を，イデオロギーとしてではなく，現実の具体的政策において，しかも諸階級の対立の緩和によって解決の努力をしている，と著者はみている。

このように，アプラの活動は，ペルーの諸階級意識を覚醒させ，その組織化を助長し，ペルーのどこに問題があるのかを政治上の争点にすることによって，国民的意識にまで高めて，従来の政治のスタイル――一方的な支配・服従という政治秩序――を一変させるのに寄与し，またそのことが，ペルーの「社会的動員」を促進させたという。

第3部　ここでは著者は，アプラがオリガルキーと手を結んだ時期（1956～62年）を「共存 (convivencia)」，アプラと犬猿の関係にあった軍部が，1962年の大統領選で優勢であったアプラのアヤを阻止するためにクーデターで樹立した軍政（1962～63年）を「柔らかい独裁 (dictablanda)」，1963年の選挙で大統領となったベラウンデ

の諸政策を「左傾化へ動くか？」と題して，それぞれ分析し，ペルーの政治の特徴を考察している。

そして　さきにふれたように，アプラはオリガルキーと手を結ぶことによって，すなわち従来のイデオロギー・戦闘性を放棄し，リアリズムに徹することによって勢力を拡大しえたこと，1962年に政権を奪取した軍部の中には，オリガルキーの番犬としての役割を拒否する，護憲派と経済発展派が誕生しており，この軍事政権は，ラテンアメリカで日常的にみられるクーデターとは質的に異なる，一定の自立性を志向する性格を持ちはじめていること，また1963年の大統領選でベラウンデは平和的に政権を獲得したが，かれの農地改革・石油国有化・税制改革に対してオリガルキーは譲歩し，時代の要請にかなりの柔軟性をしめしたという。

これらのこと，すなわち，アプラの変化，軍部の変化，オリガルキーの変化，そしてベラウンデがかなり支持されていること，は，ペルーの政治の中に，一定の了解関係が働いていることをしめしており，政権獲得の方法，それが武力（クーデター）によるか選挙によるかについての厳密な区別はあまり問題にならない政治風土は存在してはいても，諸勢力の対立が内乱には発展しない固有の秩序と正統性があることをしめしているという。

III

「社会的動員」の視角からの著者のペルー社会観は以上のようなものである。この，著者のペルー社会観，とりわけ，1930年前後の二重社会的な把握，それ以降のオリガルキーをはじめとする諸階級の変化の分析は，ペルーにおけるインディオ社会の存在という事実や，ペルーの社会主義者マリアテギ (José Carlos Mariategui) による1920年代末期のペルー社会の分析，たとえば，沿岸地帯と高地のオリガルキーの相違，萌芽的な資本主義的生産様式と封建的大土地所有の存在，アシエンダはかなり閉鎖的で，地主階級はいまだブルジョアジーに転態していない，等々の分析や (José Carlos Mariategui, *Siete Ensayos de la Interpretacion de la Realidad Peruana*, Lima, Amauta, 1928, pp. 18, 22, 24, 26, 28, 29～40)，1930年代の世界恐慌の影響（これについては著者はあまりふれていない），などを背景として念頭におけば1930年代以降，ペルーが現象的にどのように変化したのか，また，ペルーを支配していたといわれる30家族のオリガルキー (John Gerassi, *The Great Fear*, New York, The Macmillan Co., 1963, pp. 113～124) の行動様式はいかなるものか，1968年10月のベラスコ将軍 (Velasco) による軍事クーデター直前の軍部はどのようなものであったか，などの諸点についてのペルーの現実を理解するには，おそらく格好の著作と言えるであろう。ことにオリガルキーのブルジョア的転態については，著者のほかに新左翼系の論者も指摘しており (Leo Huberman and Paul M. Sweezy, "Notes on Latin America," *Monthly Review*, March 1963)，なぜペルーに本来の意味での資本家階級の力が弱いかについて著者は一つの解答を示唆しており，学問的立場の相違を超えて，共通の認識が築きはじめられたものと受け取っていいように思われるが，著者のブリコーが，統計データなどではなく，ペルーの文学作品を主要な資料として，これを描き出していることは，方法としてもユニークであり注目に値しよう。

また，「社会的動員」に伴って，二重社会的な政治構造がゆらぎはじめ，アプラという急進的な政治勢力による活動が，政治のスタイルを変え，「社会的動員」の過程をさらに加速させたとする本書のテーマに即して言えば，著者の見解は独創的なものであるだけに，アプラとインディオ・大衆との関係，経済的な要因との関連も追究すれば，もっと説得性を持ったように思われる。というのは，オリガルキーによる経済的，政治的対応は，なによりも世界恐慌による危機を背景としていたのではないかという反論も予想されるからである。また著者のアプラ評価は，たとえば，ペルーの民主主義的変革の主体は，中産階級・労働者階級・農民階級にあり，その改良的指導者としてアヤを重視したアレグザンダー (Robert J. Alexander, *Prophets of the Revolution*, New York, The Macmillan Co., 1962, pp. 75～108) の見解に近く，少し過大なものと思われる。ブリコーの本書を高く評価したパイク (Frederick B. Pike, *Hispanic American Historical Review*, Vol. XLVIII, No. 3, August 1968, pp. 530～531) も，アプラに関する著者の分析は，特に弱い (weak) と述べている。また著者は，大衆の都市への大量の移住をベースに考察しているが，その移住を引き起こした原因について著者はほとんどふれていないが，この点についても一言欲しかったように思われる。

著者の「社会的動員」を視角とするペルー社会観は，以上のような肯定的な側面を含んではいるが，多少限定を付さなければならない。これを著者の問題意識にたちかえって検討してみると，第1に，この，社会全体に影

響をあたえている大きな要因に照らしてコミュニティー・スタディーズを考えるという方法は，貴重なものであり，正当なものと思われが，その要因をどのようなものとみるかでかなり異なってくるであろうし，またそれを著者のように社会的動員にみいだすとしても，社会的動員を促す要因をどこにみいだすかによってもかなり異なった社会観が形成されるように思える。たとえば，1968年10月のベラスコ将軍によるクーデターは，ベラウンデ政権によるアメリカ資本の所有する石油資源の国有化をめぐる交渉を契機としているが，本書にアメリカ資本の位置やアメリカとの外交関係，貿易関係がほとんど出てこないことは，ラテンアメリカ一般について言われているアメリカとの関係の深さから言えば，たいへん奇異な感じを受ける。この社会的動因を視角とするペルーの政治関係の分析（第3部）を一国内に限っている著者のパースペクティブの狭さは，著者の第2の問題意識についても関連する。すなわち，著者は，ペルーの近代化は革命なしに行なわれる可能性が強い，という見透しを持つわけであるが，それは，オリガルキーの変化・柔軟性，政治のあり方の固有さ，を論拠としている。

これは著者が序文でも述べ，またパイクが「この（見透し）は，ラテンアメリカおよび合衆国の新左翼には歓迎されないであろう。」(F. B. Pike, p. 530) と述べているように，革命的騒乱の近いことを予想した新左翼の社会観に対する批判を含んでいるものであるが，オリガルキーが柔軟性をみせたとする，ベラウンデ政権による農地改革・税制改革は，キューバ革命以後の「進歩のための同盟」のもとでの改革を背景としていたことを想起すれば，オリガルキーの柔軟性についても，キューバ革命による支配者階級の動揺や，アメリカとの関係，という点で，もっと突っ込んだ理解がえられたように思われる。なぜなら，著者が見透したように，ペルーには革命的騒乱は起きなかったが，ベラスコによる政権奪取，農地改革法の公布（1969年6月24日），オリガルキーに対する敵意，は著者がオリガルキーは柔軟であるという分析とはとうてい合致しないように思われるが，評者が述べたような観点をも導入すれば，ペルー社会の現実を理解するにになにほどか益するところがあるのではなかろうかと思われる。その意味では，ラテンアメリカおよび合衆国との関係のなかでの分析も欲しかったように思われてならない。以上，著者が考えている社会的動員という視角から，どのようなペルー社会観が構成されるか検討したわけであるが，その他，気づいた点をあげれば，著者による「柔らかい独裁」，すなわち軍部の分析は，たいへんすぐれているし，ラテンアメリカの軍部を研究するうえでは，貴重なものといえる。またラテンアメリカに封建制が残存しているという見解を否定する合衆国の新左翼とは異なって，ペルーの新左翼はそれを認めているが，これはインディオ社会の存在というペルーの特殊な条件とも関連しているものと思われるが，この点，著者によるペルー新左翼の分析は，新左翼に対する批判も含めてていねいであるように思える。以上，かなり大雑把な紹介と感想である。

（調査研究部　吉田秀穂）